

2015 JUA/AUA Academic Exchange Program 参加報告

舟 橋 康 人 (名古屋大)

2015年の日本泌尿器科学会総会終了後よりアメリカ泌尿器科学会総会までの約3週間、第7回JUA/AUA Academic Exchange Programの派遣医師としてテキサス州ヒューストンのMDアンダーソン癌センターを訪れた。ヒューストンのダウンタウンはビジネス街であり、路面電車沿いにはあまりレストランもなく、到着した当初はさびれた地域にあるモーテルと病院の往復で味気ない生活であった。数日してDr. Matinがディナーとナイトドライブに連れて行ってくれたのがきっかけで、ヒューストンの飲み屋街や買い物スポットを知り、私の大好きなIPAビールを連日飲めるようになり、充実した毎日が送れるようになった。

MDアンダーソン癌センターでは主に手術の見学をした。初日から衝撃的だったのはDr. Shahによる開創膀胱全摘であるが、執刀から1時間弱でほとんど出血もなく膀胱を摘出してしまった。Dr. DavisはRALPのエキスパートであった。Dr. MatinによるRALPNでは阻血時間は7~10分ほどである。また教育ビデオでは分からない手術室内での会話やトラブルへの対処法、fellowが手術するときのprofessorの指導など、現場にいなければ分からない部分も非常に勉強になった。今回、RALPの神経温存を見る機会が多かったが、経験を積んだ術者によっても常に出血なく遂行できる訳ではなく、どの程度の出血までなら許容できるのかといったことも参考になった。私のつたない英語での「それって意味あるの？」的な失礼な質問に辛抱強く応えてくださった諸先生方にも感謝したい。手術に関しては日本より（名古屋大学泌尿器科より、と言った方が正確かも知れないが…）優れている部分もあれば、決して引けをとらない部分もあると大いに感じた。今後、少しでもフィードバックしていきたいと思う。

手術の技術以外にも、医療システムに関しても様々なことを実感できた。麻酔科が各科に対し非常に協力的で、手術件数の増加が麻酔科のメリットにもなる点については羨ましく感じた。一方で、ごく一部の施設・医師に手術が集中する構造も、確かに合理的であるかも知れないが、日本の医局制度や医師のメンタリティには合わないのかも知れない。手術の運用に関して、前立腺全摘術の当日朝5時に来院し翌日には退院するというのも、医者にとっても患者にとってもしんどいシステムである。そ



れまで私は、日本の医療制度を当然のように考えていたが、なんと人に優しいシステムなんだろうと認識を新たにしたものである。

今回のJUA/AUA Academic Exchange Programにより大変貴重な経験をすることができた。今後もあらたな人脈を形成し、自分自身のキャリアを発展させる事ができるように努力したい。今回、私を派遣医師として選考していただいた颯川先生を始めとする国際委員会の先生方、プログラムに関わっている全ての方に心から感謝したい。東京大学の中川先生ご夫妻には病院の内外で大変お世話になった。また多大なご迷惑をおかけするにも関わらず、私を快く送り出して下さった名古屋大学泌尿器科の皆様にも心より御礼申し上げたい。本当にありがとうございました。